ごしょざくらほりかわようち

御所桜堀川夜討

〔解　説〕

文耕堂、三好松洛の合作で、元文二年（一七三七）大阪竹本座にて初演。源平の戦いを背景に、「平家物語」、「義経記」、弁慶や静御前の伝説を脚色した全五段の時代物です。三段目「弁慶上使」の段は人気が高く、文楽・歌舞伎でもしばしば上演されています。

〔あらすじ〕

源平の戦いに勝利した源氏でしたが、頼朝は義経に謀反の疑いをかけていました。義経の正室卿の君は平忠時の娘であったため、義経は頼朝から忠誠を示すために卿の君の首を差し出せと言われていました。

懐妊していた卿の君が侍従の太郎夫妻の館で静養しているところへ、弁慶が堀川御所からの使いとして現れます。もうこれ以上頼朝からの圧力を無視できないと、弁慶らは密談のため奥の間へ入ります。その間、館の腰元信夫(しのぶ)と娘を訪ねてきた母のおわさが、久しぶりに和んだ時を過ごしていました。

密談を終えた侍従夫妻が戻ってきて、信夫を卿の君の身代わりにと懇願します。信夫は主人の身代わりになるのなら、と快諾しますがおわさは承知しません。十八年前に一度契って別れたきりの信夫の父親に娘を会わせるまでは死なせるわけにはいかないと、当時稚児であった相手の着ていた振り袖の片袖を見せてそのいきさつを語

るのでした。

と、その時襖の向こうでこの話を聞いていた弁慶が、突然襖越しに信夫を刺したのです。一同が驚くなか、弁慶は片肌を脱ぎ、おわさが持っているものと同じ片袖を見せ、自分が信夫の父親であると明かすのでした。驚きと悲しみにおわさは号泣します。

弁慶もまた父と名乗れぬまま、娘を手にかけなければならなかった悲しみに、生涯ただ一度の涙を流すのでした。

一方、信夫の首を落とした侍従の太郎は、身代わりが発覚しないようにと、自らの首をも差し出すために切腹します。そして二つの首を抱えた弁慶は堀川御所へと戻って行くのでした。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

弁慶上使の段

正しく出で迎ふ。

始終の様子聞く信夫、涙を押へ、傍により

「ノウそのお詞に及びませふ。十年(とせ)にあまる宮仕へも、たった一日御奉公申しても、お主様に違ひはない。不束(ふつつか)な私でも、お役にさへ立つならば」

「アヽ、コレ〳〵母を差置きつか〳〵と物いやんな。ハイ、ハイ〳〵、イヤ申し、この子はアノ、私一人で出来た子ではござりませぬ。顔も知らず名も知らぬ、父親がござります」

「アヽコリヤ〳〵、いかに狼狽ればとて、母親ばかりで出来る子が、三千世界にあらうか。その上、顔も知らず名も知らぬ、父親を尋ね手渡しするとは、マなにをしるしに尋ぬるぞ。アノここナ偽り者、表裏者めが。コリヤヤイ、子心にさへ主従の道をわきまふるに、見限りはてたる女め。娘を連れてはや帰れ。サ、花の井こちへ」

と、立上る

「ノウコレ、待って下さりませ。偽り者といはれては、親ゆえこの子の道立たず、顔も知らず名も知らぬ、夫を尋ぬるしるしはこれ」

と、上の一重を押脱げば右はかはらぬ詰袖に、左ばかりが振袖の濃き紅の染模様、橘ならぬ袖の香の、むかし床しく偲ばしく

「娘が聞く前恥しき昔話。私は元、播州姫路の近在福井村、本陣の何某(なにがし)こそ、私が父母。十八年以前、頃は夜も長月、廿六夜の月待の夜、数多泊りのその中に、二八あまりの稚児姿、こっちに思へば、その人も、すれつ縺れつ相生の、松と松との若緑、露の契りが縁の

はし。オヽ恥かしやつひ、闇がりの転び寝に、つらや人の足音に、恋人も驚きて、起きゆく袂控ゆるを振切り急ぎゆく拍子、ちぎれてわが手に残りしは、この振袖。仮寝の情は浅けれども、妹背の縁や深かりけん。その月より身も重く懐胎し、後にてなんと詮方も、産み落せしはこの信夫、縁あればこそ子まで設けしもの。この振袖を知るべにて、ふたたび尋ね逢はんと思ひ国を、国を出でて十七年、水子を抱へ様々と、さまよひ廻りし憂き艱難、いまに尋ね逢はねども、女の念力、これこそは娘よ、父よと名乗り合ひするそれ迄は、蚤(のみ)にも食はせぬ大事の娘、お役に立てぬは右の訳、卑怯未練でない申訳、ナ申し娘には、どうぞお暇を下されませ。サ信夫、立ちゃ〳〵、エゝこれはしたり、マ立ちゃいの」

といへど立兼ね、見捨て兼ね、親子心の、隔ての一重。

始終立ち聞く武蔵坊、信夫が背骨障子越し『ぐっ』と刺いて一ゑぐり、『ウン』と悶ゆる苦しみに、『こはこはいかに、こはいかに』と、傍で見る目の三人は、呆れ果てたるばかりなり。

真中に弁慶どっかと座し

「コリヤ、声低くにほざきをらう。これには深き仔細のあること。とこ吠えずと、サこれ見よ」

と、押肌脱げばこはいかに、下着の衣の紅に、大振袖の伊達模様

「ヤア、その振袖は」

「オヽ、この片袖はそっちにある筈。いつぞや播州福井村にて、人目を忍びしばしの仮寝。さては、汝であったよな」

「ム、そんならお前がその時の、あのマお稚児さんかいな」

「オヽ、書写山の鬼若丸だ」
「スリヤこの娘は真実の我が子じやないかいな」
「オヽ、初めて顔見る仮寝の父親、殺したはお主の身代りだわ」
「ハア、はっ」
と、ばかりに母親は、娘の傍に走り寄り
「コレ信夫、アレ聞きゃったかいの。そなたの父御といふは、アノ、弁慶様ぢゃといの。サちゃつと御対面申し上ぎゃいの」
と、抱き起せば、起されて
「かゝ様、何やら仰るそふなが、耳が聞こえぬ、もう目が見えぬ。わたしゃ今殺されてお主様の身代わりに立つと思へば嬉しいが、親一人子一人の私に別れてたよりなきお前のお身が案じられ、そればかりが黄泉路のさわり。イヤ申し御夫婦様、頼りのないかゝ様、どうぞお頼み申しまする。またかゝ様も今からは、お二人様を大切に、御身を大事に長生きして、とゝ様に廻り合ひ、仲良ふ暮らして下さんせ。また折々は私も不憫と思ひ朝夕の、御回向頼み上げまする。こればっかりが」
といふ声も、次第に〳〵せぐりきて、はや玉の緒も切れはてゝ、この世の縁は切れにけり。母は死骸を抱きしめ
「コレ信夫、ま一度ものをいふてたも。これが一世の別れかいの〳〵。いふて返らぬことながら、背丈伸びるに従うて、ただとゝ様に逢ひたいと、慕ふ子よりも、この母がどうぞ逢ひたい〳〵と、尋ねさまよひ、国々を、廻り〳〵て今こゝで、逢はぬがましであったもの。死ぬる今はの際までも、誠の父と知らずして、母をかばひし心根が、いじらしいやら悲しいやら、この胸を

裂く様な。同じ殺す道ならば、互ひに父よ、娘かと、名乗り合ひした上ならば、この思ひは、エゝマあるまいもの。浮世に心残るであろ。こればっかりに引かされて、三途の川と死出の山、迷ふてたもんな迷はぬ様、道は一筋はるばるぞや。法(のり)の光や燈火(ともしび)の影を力にとぼ〳〵と、歩む姿を目の先に、今見る様に思はれて、可愛いわいの」

と、ばかりにて空しき死骸を、抱きしめ声も惜しまず、泣きゐたる。弁慶涙押し隠し、

「最前より一間にて汝が話聞くと等しく、さては我が子と飛び立つばかり。生き顔も見たかりしが、生半見(なまなか)つ見せては未練の心も起こらんかと、腕に任せてゐぐりしもの、何ひとたまりも堪えうか。我、生まれてよりこの年まで後にも先にも、コレ御夫婦、たった一度でござった。アヽほててんがうな事をして生まれし我が子と聞くよりも、憎からうか可愛かるまいか。そのやうに泣くを見て、太郎夫婦のゐやらずばと、泣くより泣かぬ苦しみは、ナコリヤ、鳴く蝉よりもなか〳〵に、鳴かぬ蛍の身を焦がす。小唄も我が身に知られたり。これにつけても親の恩、今取り分けて思ひ知る。唐土(もろこし)の樊噲(はんかい)が母の小袖を母衣(ほろ)と名付け、戦場まで持ったりといふ。それを学ぶにあらねども、この下着は母の手づから下されしを、汝に片袖取られたれども、亡き母に添ふ心地して縫ひも直さず振袖のこのまゝ、四国九国一の谷へも押し立て〳〵、危ふき難を遁れしもこれぞ真に親の蔭。年月重ね肌身離さず持ちし故、名も知らず顔も知らぬ親と子の、しるしとなって十七年目にめぐり逢ひ、主君の絶体絶命の大事のお役に立ったる事、ひとへに亡き母の賜りしこの小袖に手を通し、親子一緒に引き合せ給ふとは、ハヽ〳〵

ハヽヽヽヽ広大無辺の親の慈悲。オヽよく死んだ。出かしたな。とはいひつゝも息あるうち、我こそ尋ぬる父親ぞと、こんな顔(つら)でも見せたらば、さぞ嬉しからうもの。こればっかりが残念」

と、瞼で払ふ包み泣き。侍従夫婦が貰ひ泣き。四人の涙八つの袖、八つの時計に打ち交ぜて、生まれた時の産声より、外には泣かぬ弁慶が、三十余年の溜め涙、一度に乱すぞ果てしなき。武蔵は心取り直し、

「南無三宝はや八つ時。サ太郎殿、卿(きょう)の君の首討って渡されよ」

「オヽ心得たり」

と信夫が死骸引き寄せて、あへなく首を討ち落とし、返す刀で我が弓手の小脇にがはと突っ込んだり。人々

「これは」

と立ち騒ぐ。

「ヤレ騒ぐまい武蔵殿。我が切腹御合点が参らぬか。卿の君の乳人とは鎌倉殿もしろしめしたる侍従太郎がこの首を添へて渡さば、天地を見抜く梶原も、身代りとはよもいふまい。サア武蔵殿、時移る。サ早く」

「オヽ合点」

と抜き放し、ひらりと見えし刀の影。首は前にぞ落ちにける。立ち直って大音声、

「ヤア〳〵門前に控えし者ども確かに聞け。卿の君の御首、侍従太郎二つの首を、たゞ今受け取り立ち帰る」

と、それと知らすも胸あって館へ響く唸り声。すぐに袂を押し切り〳〵二つの首を、包むに余る目に漏るゝ涙に嘆き果てしなく、

「さらば〳〵」

と、首を左右にかき抱き立ち上がれば、

「コレノウ暫し」

と取り付いて、

「我は未来の約束せん」

「我は親子の一世の限り」

「ともに名残に今一度、亡き顔見せてたべなう」

と、泣けど慕へど焦がるれど、心強くも振り捨てゝ、見せぬも辛し見ぬも憂し。帰らぬ道にあこがるゝ。夫の別れ子の別れ、二つ嘆きを一筋に、見捨てゝ御所へぞ立ち帰る。